

律

端

亨

編纂

現代短歌分類辭典

新裝判
34卷

津
端
亨
編纂

現代短歌分類辭典

新裝判
34卷

現代短歌分類辞典

新装版 34 卷

通卷 1 9 2

平成六年 二月十日発行

定価一六、七〇〇円

著者発行
兼印刷者

津 端 亨

発行所

現代短歌分類辞典刊行所

代表 津 端 亨

〒
345

埼玉県北葛郡杉戸町宮前一九六一五

電話（〇四八〇）三八一〇〇四〇番

振替 東京三一九三二一四

目次

目次	歌数	頁数	歌数	頁数	歌数	頁数
でもと〔手元〕	九	一	でれいひと〔テレビドラマ〕	二	八六	一四八
でももの〔出物〕	一	一	てれひほうそう〔テレビ放送〕	三	八六	二四八
でゆ〔出湯〕	三四	一	てれる〔照れる〕	一	八六	三八一
てら〔寺〕	一四六	二	てろ〔テロ〕	四	八六	一四八
てらおとこ〔寺男〕	二	三九	てろりすと〔テロリスト〕	四	八六	一五七
てらそう〔寺僧〕	五	三九	てろりずむ〔テロリズム〕	一	八六	二五七
てらにわ〔寺庭〕	一六六	三九	てわざ〔手業〕	三	八六	三一五
てらもん〔寺門〕	三〇	四三	でわさんざん〔出羽三山〕	二	八六	一五八
てらやま〔寺山〕	三五	四四	てわたす〔手渡す〕	二	八七	七五八
てらこや〔寺子屋〕	一	四五	ではふじ〔出羽富士〕	三	八七	四一五
てらしだす〔照らし出す〕	二	四五	てん〔天〕	一	八八	一七四
てらす〔テラス〕	一九	四五	てん〔点〕	四	八八	二〇
てらす〔照らす〕	四〇	四六	でんあつ〔電圧〕	三〇	八八	一九〇
てらてら〔てらてら〕	二七	五六	でんあんもん〔天安門〕	一六五	八九	二九〇
てらびあ〔テラピア〕	一	五七	てんい〔転移〕	一六二	一三四	一九〇
てらまち〔寺町〕	一六	五七	てんい〔天意〕	一	一三九	四九〇
てり〔照り〕	九八	五八	てんいむほう〔天衣無縫〕	一七三	一三九	一九〇
てりい〔デリー〕	一	八三	てんいん〔店員〕	二	一四三	二一九
てりかへし〔照り返し〕	一四	八三	でんえん〔田園〕	一四五	一四三	一九一
てりかへす〔照り返す〕	四三	八四	でんえんちようふ〔田園調布〕	一	一四八	一九一
てりかがやく〔照り輝く〕	二	八五	てんか〔天下〕	三	一四八	一九一
てりかげり〔照り翳り〕	一七	八五	てんかこっか〔天下国家〕	二	一四八	一九二
てりかしい〔デリカシー〕	一	八五	てんかむてき〔天下無敵〕	七	一四八	一九二

てんかむひ〔天下無比〕	一 一九二	てんき〔天気〕	四九 一九六	でんぎょう〔伝教〕	四 二〇二
てんか〔点火〕	四 一九二	てんき〔転機〕	五 一九七	でんぎょうたいし〔伝教大師〕	四 二〇二
てんか〔転嫁〕	一 一九二	でんき〔伝記〕	八 一九七	てんきよほう〔天気予報〕	五 二〇二
てんか〔添加〕	一 一九二	でんき〔電気〕	三〇 一九八	でんきろ〔電気炉〕	四 二〇二
てんか〔天火〕	一 一九二	でんきいす〔電気椅子〕	一 一九八	てんきん〔転勤〕	二 二〇二
てんが〔典雅〕	一 一九二	でんきくらげ〔電気くらげ〕	二 一九九	てんきん〔天金〕	二 二〇二
でんか〔殿下〕	三 一九三	でんきず〔天気図〕	三 一九九	てんぐ〔天狗〕	二六 二〇三
でんか〔電化〕	三 一九三	でんきすたんど〔電気スタンド〕	六 一九九	てんぐいわ〔天狗岩〕	一 二〇三
でんかい〔電解〕	二 一九三	でんきがま〔電気釜〕	一 一九九	てんぐかぜ〔天狗風〕	五 二〇三
でんかい〔転回〕	二 一九三	でんきぎぐ〔電気器具〕	二 一九九	てんぐず〔天狗巢〕	二 二〇三
てんかいあん〔天海庵〕	一 一九四	でんきこたつ〔電気炬燵〕	一 一九九	てんくう〔天空〕	一六 二〇四
てんがい〔天涯〕	四 一九四	でんきこんろ〔電気コンロ〕	二 一九九	てんぐさ〔天草〕	一七 二〇四
てんがいこどく〔天涯孤独〕	一 一九四	でんきせつやく〔電気節約〕	一 一九九	てんけい〔天恵〕	一 二〇五
てんかいち〔天下一〕	一 一九四	でんきせんたくき〔電気洗濯〕	三 一九九	てんけい〔典型〕	一 二〇五
でんがく〔田楽〕	九 一九四	でんきそうじき〔電気掃除〕	一 二〇〇	てんけい〔点景〕	一三 二〇五
てんかこくか〔天下国家〕	一 一九四	でんきたいぷらいたあ〔電気タイプライター〕	一 二〇〇	てんけいてき〔典型的〕	一 二〇五
てんかぢや〔天下茶屋〕	一 一九四	でんきとけい〔電気時計〕	五 二〇〇	でんげきせん〔電撃戦〕	二 二〇五
てんかびと〔天下人〕	二 一九四	でんきのこぎり〔電気鋸〕	一 二〇〇	でんげきき〔電撃機〕	一 二〇五
てんかふん〔天花粉〕	一 一九五	でんきふとん〔電気蒲団〕	二 二〇〇	でんけきりょうほう〔電撃療法〕	一 二〇五
てんから〔天から〕	二 一九五	でんきようせつ〔電気熔接〕	二 二〇〇	てんけん〔天険〕	一 二〇五
てんかん〔癲癩〕	一 一九五	でんきれいぞうこ〔電気冷蔵庫〕	一 二〇〇	てんけん〔点検〕	五 二〇五
てんかん〔転換〕	二 一九五	でんきろ〔電気炉〕	六 二〇〇	でんげん〔電源〕	二 二〇六
てんかんき〔転換期〕	二 一九五	でんきゅう〔天球〕	一 二〇〇	でんげんきょう〔天眼鏡〕	二 二〇六
てんかん〔展観〕	三 一九五	でんきゅう〔電球〕	二八 二〇〇	てんこ〔点呼〕	一 二〇六
てんがん〔点眼〕	四 一九五	でんきょ〔転居〕	四 二〇一	てんこう〔天候〕	六 二〇六
てんがんきょう〔天眼鏡〕	二 一九六	でんぎょう〔転業〕	一 二〇二	てんこう〔転向〕	五 二〇六

てんこう〔転校〕	三二〇七	てんしゅ〔天守〕	一七二四二	てんしん〔点心〕	二二五二
でんこう〔電光〕	一三二〇七	てんしゅ〔店主〕	三二四二	てんしん〔転身〕	二二五二
でんこうにゅーす〔電光ニュース〕	八二〇七	てんじゅ〔天寿〕	四二四二	てんしん〔転進〕	一一五二
てんごく〔天国〕	二六二〇八	てんしゅかく〔天守閣〕	二二四二	てんしん〔天真〕	二二五二
てんごく〔典獄〕	一一〇八	てんしゅきよう〔天主教〕	四二四三	てんしん〔天津〕	一〇二五二
でんごん〔伝言〕	三二〇八	てんじゅくぼたん〔天竺牡丹〕	二二四三	てんじん〔天人〕	一七二五三
てんさい〔天才〕	七二〇九	てんしゅつ〔転出〕	一一四三	てんじん〔天神〕	八二五三
てんさい〔天災〕	二二〇九	てんしゅどう〔天主堂〕	一六二四三	でんしん〔電信〕	五二五四
てんざい〔点在〕	四二〇九	てんじょ〔天助〕	一一四四	でんしんき〔電信機〕	一一五四
てんざい〔天際〕	四二〇九	てんじやう〔天上〕	三五二四四	てんじんさま〔天神様〕	一一五四
てんさく〔添削〕	七二〇九	てんじやう〔天井〕	一六五二四五	でんしんばしら〔電信柱〕	一一五四
てんし〔天子〕	一四二〇九	てんじやう〔添乗〕	一一四九	てんじんまつり〔天神祭〕	一一五四
てんし〔天使〕	二二二〇	でんしやう〔伝承〕	一一五〇	てんしらんまん〔天真爛漫〕	一一五四
てんし〔展翅〕	二二二一	てんしやう〔転生〕	三二五〇	てんすう〔点数〕	一一五四
てんじ〔点字〕	六二二一	でんじやう〔殿上〕	四二五〇	てんずる〔転ずる〕	一一五四
てんじ〔展示〕	一三二二一	てんじやううら〔天井裏〕	五二五〇	てんずる〔点ずる〕	四二五四
でんし〔電子〕	二二二一	てんじやうかい〔天境界〕	四二五〇	てんせい〔転生〕	三二五五
てんじく〔天竺〕	一四二二二	てんじやうがわ〔天井川〕	一一五〇	てんせき〔典籍〕	二二五五
てんじくぼたん〔天竺牡丹〕	二二二二	てんじやうてんげ〔天上天下〕	二二五〇	でんせつ〔伝説〕	三三二五五
てんしつ〔天質〕	一一二二	てんじやうてんげゆいが…〔天上天下唯我独尊〕	一一五〇	てんせん〔転戦〕	二二五六
てんじつ〔天日〕	一八二二二	てんじやうびと〔殿上人〕	三二五〇	てんぜん〔恬然〕	一一五六
でんしゃ〔電車〕	一〇五五二三	てんしよく〔天職〕	一一五一	でんせん〔電線〕	九六二五六
でんしやせんろ〔電車線路〕	七二四一	てんしよく〔転職〕	六二五一	でんせん〔伝染〕	七二五八
でんしやどおり〔電車通〕	四二四一	でんしよく〔電飾〕	三二五一	でんせん〔電閃〕	一一五九
でんしやみち〔電車道〕	一六二四一	でんしよばと〔伝書鳩〕	一一五一	でんせんびやうしや〔伝染病舎〕	二二五九
てんしゅ〔天主〕	九二四一	てんしん〔天心〕	一五二五一	でんそうしやしん〔電送写真〕	四二五九

てんぞく〔転属〕	一 二五九	てんてつぎ〔転轍機〕	二 二八四	てんねんしょく〔天然色〕	三 三〇五
てんぞく〔纏足〕	五 二五九	てんてん〔転転〕	五 二八五	てんのう〔天皇〕	一四三 三〇五
てんそん〔天孫〕	四 二五九	でんでんたいこ〔でんでん太鼓〕	二 二八五	てんのうごじゅんこう〔天皇御巡幸〕	一 三〇九
てんたい〔天体〕	一 二六〇	てんてんと〔点々と〕	四四 二八五	てんのうき〔天皇旗〕	一三 三〇九
でんたつ〔伝達〕	二 二六〇	てんと〔テント〕	一八 二八六	てんのうざん〔天王山〕	二 三〇九
てんたん〔恬淡〕	三 二六〇	てんとう〔店頭〕	四〇 二八七	てんのうじ〔天王寺〕	四 三〇九
でんたん〔伝単〕	五 二六〇	てんとう〔点灯〕	三 二八八	てんのうせい〔天皇制〕	五 三〇九
てんち〔天地〕〔あめつち〕	七三五 二六〇	てんとう〔転倒〕	四 二八八	てんのうへいか〔天皇陛下〕	二〇 三二〇
てんち〔転地〕	一 二七九	でんとう〔電灯〕	四〇九 二八八	てんば〔天馬〕	一六 三二〇
でんち〔田地〕	四 二七九	でんとう〔伝統〕	二四 二八九	でんば〔電波〕	一二 三二一
でんち〔電池〕	二 二八〇	でんどう〔殿堂〕	一五 二九九	でんばた〔田畑〕	三〇 三二一
でんちく〔電蓄〕	一 二八〇	でんどう〔伝道〕	四 三〇〇	でんばた〔田畠〕	四 三二二
てんちじん〔天地人〕	二 二八〇	でんどう〔伝導〕	一 三〇〇	てんぴ〔天日〕	一八 三二二
てんちそうぞう〔天地創造〕	一 二八〇	でんどうき〔電動機〕	一 三〇〇	てんぴ〔天火〕	一 三二三
てんちむよう〔天地無用〕	一 二八〇	でんとうむし〔天道虫〕	七 三〇〇	てんぴょう〔点描〕	六 三二三
てんちゃ〔点茶〕	二 二八〇	てんどん〔天井〕	二 三〇一	でんぴょう〔伝票〕	三 三二三
てんちゅうくみ〔天誅組〕	二 二八〇	てんない〔店内〕	四 三〇一	てんぴょう〔天平〕	四七 三二三
でんちゅう〔電柱〕	八九 二八〇	てんにょ〔天女〕	四二 三〇一	てんびん〔天秤〕	六 三二五
てんちよう〔天頂〕	一 二八三	てんにん〔天人〕	一八 三〇二	てんぶさんけい〔天賦山系〕	一 三二五
てんてう〔天朝〕	一 二八三	てんにん〔転任〕	六 三〇三	てんぷ〔添付〕	一 三二五
てんちようせつ〔天長節〕	一六 二八三	てんにんそう〔天人草〕	一 三〇三	てんぷ〔貼付〕	一 三二五
でんつういん〔伝通院〕	三 二八三	でんねつ〔電熱〕	一 三〇三	でんぶ〔田夫〕	一 三二五
てんてき〔天敵〕	一 二八四	でんねつぎ〔電熱器〕	一四 三〇三	てんぶく〔転覆〕	四 三二五
てんてき〔点滴〕	一四 二八四	てんねん〔天然〕	二五 三〇三	てんぶくろ〔天袋〕	一 三二五
てんてつ〔点綴〕	三 二八四	てんねんがす〔天然ガス〕	二 三〇四	てんぶら〔天麩羅〕	一二 三二六
でんてつ〔電鉄〕	三 二八四	てんねんきねんぶつ〔天然記念物〕	五 三〇四	てんぶん〔天分〕	三 三二六

でんぶん〔電文〕	四三六	てんめい〔天明〕	七三三	でんわ〔電話〕	二三三九
でんぶん〔澱粉〕	四二六	てんめつ〔点滅〕	一九三三	でんわき〔電話機〕	四三六
てんべん〔天変〕	六三六	てんめん〔纏綿〕	二三四	でんわきよく〔電話局〕	一三六
てんべん〔転変〕	四三七	てんもくざん〔天目山〕	六三四	でんわちよう〔電話口〕	五三六
てんぺんちい〔天変地異〕	二三七	てんもんがく〔天文学〕	二三四	でんわちよう〔電話帳〕	一三六
てんぽ〔店舗〕	一一三七	てんもんだい〔天文台〕	一一三五	と〔接続助詞〕	五三六
てんぽ〔展墓〕	一一三七	てんや〔店屋〕	二三五	と〔格助詞〕	一五三六
てんぽ〔転補〕	一一三七	てんやく〔点訳〕	二三五	ど〔接続助詞〕	四三七
てんぽ〔テンポ〕	四三七	てんやくわんや	二三五	と…かく	九三七
てんぼう〔展望〕	一六三八	てんゆう〔天佑〕	二三五	ーと〔接尾語〕	七三八
てんぼうきよう〔展望鏡〕	一一三八	てんよ〔天与〕	四三五	と〔名詞〕	三三八
てんぼうしyou〔展望哨〕	一一三八	てんらい〔天来〕	四三五	と〔戸〕	八四八
てんぼうだい〔展望台〕	一三三八	でんらい〔伝来〕	四三五	とあみ〔投網〕	二二六二
てんぼううまど〔展望窓〕	一一三九	てんらく〔転落〕	九三六	とある〔とある〕	六〇三六三
でんぼう〔電報〕	四九三九	てんらんざん〔天覧山〕	一一三六	とい〔問い〕	三三六五
でんぼう〔伝法〕	二二〇	てんらん〔展覧〕	一一三六	とい〔樋〕	七九三六五
でんぼういん〔伝法院〕	六三〇	てんらんじyou〔展覧場〕	一一三六	とい〔土肥〕	一一三六七
でんぼうがわせ〔電報為替〕	二二〇	てんらんかい〔展覧会〕	一〇三六	ときき〔吐息〕	九二三六七
てんぼうしや〔展望車〕	一一三二	てんりきyou〔天理教〕	六三六	といし〔砥石〕	八三七〇
てんまく〔天幕〕	三九三二	でんりゅう〔電流〕	六三七	といた〔戸板〕	八三七〇
でんません〔伝馬船〕	二二三二	てんりゅうがわ〔天竜川〕	三八三七	どいつ〔ドイツ〕	三九三七〇
でんまちょう〔伝馬町〕	一三三二	てんりゅうじ〔天竜寺〕	八三八	どいつあざみ〔ドイツ薊〕	一三七二
てんまつ〔願末〕	一三三二	でんりよく〔電力〕	九三八	どいつとうひ〔ドイツ唐檜〕	一三七二
てんまど〔天窓〕	三三三三	でんれい〔伝令〕	六三八	といれ〔トイレ〕	一三七二
てんまんぐう〔天満宮〕	四三三	でんれいしyou〔伝令書〕	一三九	といれつと〔トイレット〕	一三七二
てんめい〔天命〕	四三三	てんらうせい〔天狼星〕	一三九	といんぴー〔トインピー〕	一三七二

とう〔党〕	二二 三七二	どうおう〔堂奥〕	一 四〇四	とうがね〔東金〕	一 四二七
とう〔塔〕	四九九 三七三	どうおん〔同音〕	三 四〇四	とうから〔疾うから〕	一 四二七
とう〔訪う〕	一 三八六	とうか〔十日〕	一〇一 四〇四	とうがらし〔唐芥子・唐辛子〕	八二 四二七
どう〔洞〕	七一 三八六	とうか〔灯下〕	二 四一〇	とうかん〔盗汗〕	一七 四一〇
どう〔胴〕	四一 三八八	とうか〔灯火〕	八八 四一〇	とうかん〔等閑〕	一一 四二二
どう〔堂〕	二二九 三八九	とうか〔投下〕	四四 四二二	とうかん〔投函〕	三 四二二
どう〔銅〕	一二 三九五	とうか〔冬瓜〕	五 四二二	とうがん〔冬瓜〕	四 四二二
とうあ〔東亜〕	三一 三九六	とうが〔冬芽〕	二二 四二二	とうがん〔東岸〕	一 四二二
どうあげ〔胴上げ〕	一 三九六	とうが〔陶画〕	一 四二三	とうがん〔童顔〕	二〇 四二二
とうあん〔答案〕	二九 三九六	どうか〔同化〕	三 四二三	とうかん〔統監〕	二 四二三
どうい〔同位〕	一 三九七	どうか〔銅貨〕	八 四二三	どうかんやま〔道灌山〕	一 四二三
どうい〔胴衣〕	一 三九七	どうか〔導火〕	一 四二三	とうき〔冬季〕	一 四二三
どうい〔同意〕	一 三九七	どуг〔童画〕	二 四二四	とうき〔冬期〕	二 四二三
どういう〔どういう〕	一 三九八	どうか	五 四二四	とうき〔陶器〕	三七 四二三
どういご〔同意語〕	一 三九八	とうかい〔東海〕	三九 四二四	とうき〔騰貴〕	一 四二三
どういしょ〔同意書〕	一 三九八	とうかい〔倒壊・倒潰〕	三 四二五	とうき〔登記〕	一 四二三
とういす〔藤椅子〕	二二 三九八	とうかいどう〔東海道〕	一三 四二五	とうぎ〔討議〕	三 四二三
とういつ〔統一〕	五 三九八	とうかいどうせん〔東海道線〕	三 四二五	とうぎ〔当帰〕	四 四二四
どういつ〔同一〕	二 三九九	とうかいむら〔東海村〕	一 四二五	とうぎ〔同期〕	一 四二四
とういん〔黨員〕	九 三九九	とうかかんせい〔灯火管制〕	三〇 四二六	とうぎ〔動悸〕	四三 四二四
どういん〔動員〕	一六 三九九	とうかく〔頭角〕	一 四二七	とうぎ〔動機〕	四 四二五
どういんれい〔動員令〕	六 四〇〇	どうかく〔同学〕	二 四二七	とうぎ〔銅器〕	一 四二五
どうう〔堂宇〕	六 四〇〇	どうかく〔道学〕	一 四二七	とうぎ〔動議〕	二 四二五
とうえい〔灯影〕	一一七 四〇〇	どうかさよう〔同化作用〕	一 四二七	とうぎ〔道義〕	二 四二六
とうえい〔投影〕	七 四〇三	どうかせん〔導火線〕	三 四二七	とうぎ〔胴着・胴衣〕	三 四二六
とうおう〔東欧〕	二 四〇三	どうかつ〔恫喝〕	一 四二七	とうぎ〔同気〕	一 四二六

とうぎょ〔同義語〕	一四二六	とうぐや〔道具屋〕	一四六〇
とうきしょ〔登記所〕	二四二六	とうげ〔峠〕	二四六〇
とうきび〔唐黍〕	九五四二六	計	一六一六四首
とうきゅう〔投球〕	二四二九		
とうぎゅう〔闘牛〕	二四二九		
とうきゅう〔同級〕	三四二九		
とうきゅうせい〔同級生〕	五四二九		
とうぎょ〔統御〕	一四二九		
とうきょ〔同居〕	四四二九		
とうきょ〔闘魚〕	二四三〇		
とうきょう〔東京〕	九九六四三〇		
とうきょう〔同郷〕	二四五五		
とうきょう〔道教〕	一四五六		
とうきょう〔道鏡〕	一四五六		
とうぎょう〔同業〕	六四五六		
とうぎょう〔童形〕	五四五六		
とうきょうえき〔東京駅〕	二九四五六		
とうきょうさいばん〔東京裁判〕	三四五七		
とうきょうと〔東京都〕	五四五七		
とうきょにん〔同居人〕	二四五七		
とうきん〔同衾〕	一四五七		
とうぐ〔道具〕	三三四五七		
とうぐう〔東宮〕	四四五八		
とうぐうごしょ〔東宮御所〕	一四五八		
とうくつ〔洞窟〕	三三四五九		
とうぐみ〔胡頰子〕	二五四五九		

てもと【名詞】「続き」

釜よりぞ飯を移すに手馴れざる婦の手元の覚束なさほも（あそら）

金子不泣

千足屋の包紙とく手元よりころげいでたる大きなパイヤ①

竹添履信

刺さけて毬の中より栗拾ふ手元危ふく子らのはしやぎ

谷口寛

奈良の山の春はいまだしスケッチする手元に寄せし鹿の鼻冷ゆ②

野田孝之

太棹のぴんと鳴りたる手元より夜のかなしみや眼をあけにけむ①

北原白秋

（現代短歌大系）

夕ぐれて手元あやふき大き土間にしらしらとただ米ばかりの光⑤

吉植庄亮

わが手元なほ明るしと父のいふ窓にせまりてひぐらしの鳴く①

三ヶ島霞子

吾が手元に残りし茉莉の一鉢を日当る二階に今日持ちてゆく③

吉田正俊

吾が稀に喰ふ紅焼鯉魚の骨つつきぬる手元あさまし①

野田孝之

でもの【名詞】「出物」

② 売りに出された物。特に、古道具・骨董や格安の品にいう。

此のあたりには子供の望む工具類が皆出物にて並べられたり

土屋文明

でゆ【名詞】「出湯」

地中から湧き出る湯。温泉。いでゆ。

朝露の蔭の広葉つみて匂ひある出湯をむすび口にうつせり①

新井洗

浅間の出湯の宿に二夜寝て屋根の雪ずる町をとぼしむ④

高田浪吉

汗あえし肌へ洗ふと赤錆びし田中の出湯に一ふろあびつ①

豊島晃

青葉うつめたき雨に濡れきつる軀をおもむろに出湯に沈めぬ④

吉野秀雄

家にあれば狭き跼む湯浴にて山の出湯にわが身を伸ばす⑦
生く薬もとめむよりは箱根やま神の出湯におりたちてまし①
いたづらに出湯あふれて秋ふかき山の上の宿人影もなし①

出でて来て思はぬ近き山あひの有馬の出湯あかく湧けるを⑧

出湯出て心羨しくなりにけり日中のかまの青のその光はや

出湯あがればむさぼり食ふ朝ゆふかかる己を疑ひもせず

薄き着物しだらにまとひ歩むあり出湯の湯気のふきちる川岸⑥

海越えて大隅の嶺に湧く雲を逆写しせり瀉口の出湯④（角川文庫）

桑の葉の照りのよき道ななくりの出湯はこと湯の気は招く①

来よ来よと常に言ひける豊国の出湯の君がよき家はここ①

しなのなる浅間の出湯に浸りつつ友と語るも子どもらがこと④

信濃なる浅間の出湯しとしに雪のふる日をひとりかも居る①

少女どきたのしく妻が湯浴みせる形見の出湯にわが身沈まず⑤

澄み透る出湯にわれの独りゐてその湯静かにこぼれつつあり①

相聞歌作りて聞かす人ありて出湯の真昼われは横臥す①

谿川の岩間に湛ふ青出湯あらはなる身をはるさめの過ぐ①

疲れたる眼にしみぬ伊香保湯の出湯のいろは黄にあふれゐて①

名細しき立科山に出湯ありと都人等は今知らぬかも①⑨

夏避くる出湯の宿に我居れば百合活けに来るをとめかほよし①

南無薬師瑠璃光如来みちのくの蔭の出湯にとはにありたまへ①

肉むらにつつましさもつをみなごは出湯くみあげ洗ひはじめつ

岡野直七郎

昭憲皇太后

佐佐木信綱

高田浪吉

穂積忠

鈴江幸太郎

鹿兒島壽藏

吉野秀雄

金子元臣

川浪磐根

相馬御風

小杉放庵

窪田章一郎

立花馨

立花馨

立花馨

米川稔

高田浪吉

篠原志都児

正岡子規

小杉放庵

鹿兒島壽藏

箱根山出湯めぐりのかへるさに秋なく虫のこゑをきくかな
 晴れぬ日の続く秋口や出湯より帰り来てわが痛み治まらず②

太田 水穂
 鹿兒島 壽藏

ひがし山浅間の出湯朝をはやみ立行く路の露じめりかな①

小杉 放庵

ひた土に出湯の湧くを手に掬みてかなしがりつつ幾日ものむ①

米川 稔

山の上の疲れはしるくいできつつ伊香保出湯に一日遊ばむ①

高田 浪吉

槍ヶ岳二三尺ほど穂先みゆ河原の出湯に日のくるころ

牧野 良三

(新萬葉集七)

夜の雲の清みあかく浮く狭間きて頭はの出湯われはしたしむ②

鹿兒島 壽藏

わがたどき苦しきものを雪山のま洞の出湯は身にしみにけり①

穂積 忠

(現代短歌大系)

草鞋とけば白き土ふまず柔らかき出湯にひたし息づきにけり①

新井 洸

(新万葉集一)

【名詞】 【寺】

① 本堂などの建物を備え、僧尼が居住して、法事や修行を行つた
 めの施設。私的な性格の強い庵や特定の修行を目的とする道場に
 対し、一定の設備を持つ、より正式な宗教施設。伽藍。

近江の寺にあつき日中の幾時をこころはたりて惜しけくもあらず

鹿兒島 壽藏

①

赤坂の城の落ちたるはこの寺にいましし年の梅雨の頃なる③

川田 順

暁鳥のこゑをきかずにゑひしれぬみ寺の山に鳥なき如し⑧

高田 浪吉

あかつきに群れ鳴く蟬のこゑ聞けば山のみ寺に父ぞ恋しき⑥

斎藤 茂吉

暁の月涙のごとく真白けれ御寺の鐘の水わたる時⑩

與謝野 晶子

暁の寺の庭よりくだりゆき道にとどかむ朝かけを恋ふ②

竹尾 忠吉

暁の六時を期して打つ鐘をしばしばきけどいづくの寺との知らず
 (はつゆきおこし)

鹿兒島 やすほ

あかつきはやすけき寺の鐘の音妻子らより少し早く起きて聴く

斎藤 喜博

あかときの鐘鳴らす大寺に我は寝てあかときの鐘を知らざりしは

金子 信三郎

や①

赤蜻蛉ゆふ日にむるる寺の門にやせし法師の落葉はく見ゆ

金子 薫園

赤彦をとぶらふ寺にきたりけり木蓮の花にわれも居対ふ⑩

土岐 善麿

秋浅き甲斐のみ寺の大き炉にもろろの木燃えはじめたり③

山下 陸奥

秋風に寺の樹木の鳴るなかを恋ひ歩けども妹に逢はず⑦

金子 薫園

秋風の寒きあさけをわが姉はさびしく清く寺を去りましぬ①

久松 潜一

秋草も御寺の庭に咲きあたり父の忌日にお経聞きをる

津端 亨

秋しぐれさんたまりあの寺の庭に白菊の花さきみだれたり

永田 竜雄

秋篠の寺の細道ゆくわれを迎へて包む紅黄の翳か

初井 しづ枝

秋篠の寺の竹藪荒れ荒れて風の名残を今にとどめつ⑦

宮 柊二

秋篠のみ寺の前に早稲田刈る利鎌さくさく聞きのさやけさ④

吉野 秀雄

(角川文庫)

秋篠やみ寺の鐘楼その鐘の吊りはあれども青く錆びにけり①

豊島 逃水

秋となればお寺はふもとを眺めゐて何かつぶやけり青いお茶の山

前川 佐美雄

③

秋の雨いく日降れば寺裏のぬるでの塩は葉に流れたり

赤津 岩夫

(新萬葉集一)

秋の風西の空ふく燕われかいの寺の塔にかへらむ

茅野 雅子

秋の空四方に垂れて常磐木の裾かざる中の大なる寺⑩

秋の立つ暑さじりじり照のそら古き寺訪ふ百日紅の花③

秋の田はすでに刈られてひろびろし遠くにかすむ寺の大屋根②

秋の寺、ここはお国を何百里友よわれらを去りていづこに③

秋の日の照れる田中の細き道み寺が門にゆきてつきにけり①

秋の水なかの島なるおん寺の時鐘うちぬ月のぼる時(舞姫)

秋の夜の今宵いかなることよひにてひとり野寺の月をみるらむ

(新萬葉集別)

秋萩の花咲く寺に雨避けて歌かたらひし面影に立つ

秋ふかきみ寺のさるすべり老いて勁きに君は生きたり④

秋ふかくみのる稲田を一望に見渡しなれぬ丘の寺に住みて⑦

秋ふかみ山のみ寺の椎だたみわが踏む下駄の音のさやけさ③

秋真昼ふるき御寺にわれ一人立ちぬあゆみぬ何のにほひぞ

あきらかに淡花桜ゆらぐかな御寺の山の春の青きに⑥

曙やくらまの御寺さくら咲き比叡にあるなり曼陀羅の雲⑦

朝々に仰ぐは寺の大銀杏空の秀枝よ何時しか芽ぶく②

朝々のつとめの鐘の鳴れる時かならず通るこの寺の前を⑩

朝々を頬白来なく山の寺古木のけやき芽をふきにけり

朝雨や吉野の山の大寺に昨のひと夜はねむり足らひし③

朝かげの冷たき草にすわりゐて寺うら庭のさくら花見つ⑥

朝聴くに女性の声もまびらひて現しき寺やまた明けそめつ⑩

(多磨四)

窪田 空穂

岡 麓

上田 英夫

西川 百子

豊島 逃水

與謝野 晶子

岩倉 具視

村上 成之

金子 不泣

今井 邦子

相馬 御風

若山 牧水

尾上 柴舟

與謝野 晶子

野田 孝之

金子 薫園

藤沢 正俊

岡野 直七郎

川田 順

北原 白秋

朝清めおこたりもなき大寺の庭のいさごに散このはかな

朝霧にほろこほること啼くこゑはこの御寺の鳩にかまなも

浅草の寺に立てたる記念碑のほこりを掃ふまれに來りて②

浅草の某寺に墓はのこりゐつ伝はりにし妻の祖の李家

浅草のみ寺にちかく餅くひし君と千櫓とわれとおもほゆ

浅草のみ寺に詣で戦にゆきし兵の家族と行きずりに談る

浅草のみ寺をこめて一目なる平らなる市街かなと見おろす⑩

朝雨や吉野の山の大寺に昨のひと夜はねむり足らひし

朝立ちて行く野の寺によべ聞きし声の主人の鐘を見るかな①

朝月の残るふもとの寺の庭に冬枯銀杏ひとり木高き

朝の寺より鐘鳴りきこゆ山系ののびて來りし国さかひにて

朝は子と銀なん焼きて仮住みの寺に迎ふる冬三たびなり①

朝早く甲斐の国より出で來り友は寺にて受付をせり

朝日ささぬ寺の舞台に天照らす母なる神の喜與山を拝む②

朝日さす向の山の寺の森つやつやく小ある緑かな⑤

あさぼらけ港のひとら水汲むとこの寺の井にあつまり來るも①

朝まだき鉦うち鳴らすこの寺に尼うつくしく生を終るらむ③

あしがらの御寺の猫のなき声も忘るるばかり海風ざわたる②

蘆しげき日高の川の川隅にきさき悲願の大寺を建つ③

足摺のみ寺に通ふ遍路みち尽くるあたりの海を寂しむ②

あしびきの山より下る夕雲に麓の寺の鐘はひびかふ①

足曳きの山のみ寺にふる雨の更けて寂しく妹の居るらむ①

井上 文雄

北原 白秋

土岐 善麿

酒井 広治

斎藤 茂吉

斎藤 茂吉

斎藤 茂吉

岡野 直七郎

武島 羽衣

毛呂 清春

斎藤 茂吉

野田 孝之

山下 陸奥

中河 幹子

尾上 柴舟

古泉 千櫓

岡野 直七郎

與謝野 晶子

松本 滋代

吉井 勇

山口 茂吉

金子 信三郎

足曳の山の青葉をわれ恋ひて蟬しげくなく寺に来にけり
明日ゆかむ寺を見にいでネオンの灯うす暗き街をもとほりしのみ

⑤

梅村 蓉一
長谷川 銀作

あたたかう萱を厚目に屋根ふきて一抱へ木の落葉する寺⑥

太田 水穂

頭を剃りて寺に入るとも寺の世に汚穢はあらむと思ふさびしさ④

岡野 直七郎

新らしき瓦ふき並べ青丹よし奈良の大寺春の風ふく①

藤 真

新しき寄進の札を打ちぬらし長谷のみ寺にふれる夏雨①

尾張 穂草

新しきみ寺の時よ内外もかがやきたらむいにしへにして②

高田 浪吉

新しく建てかへられて華やけり山の上の寺のしたしみがたき

松田 常憲

(秋風抄)

暑かりし日のほとぼりの残りたるみ寺の庭に歎きたりけれ⑫

斎藤 茂吉

(のぼり路)

暑き日にくぐる山門影立てる樹木の多き麓のみ寺⑧

高田 浪吉

暑き日に悲願のありて友ひとり山のみ寺に旅だちゆきぬ③

結城 哀草果

暑き月のやうやく暮れし寺来れば物煮るにはひ庭にしるけれ⑩

上杉 一甫

安土山寺の襖の絵をかくと花のちる日を独りかも居る①

小杉 放庵

集まらむ友を待ちつつひとりなり御寺の庭をゆく水の音①

中島 哀浪

集まりて来む友を待ち蟬の鳴く松江の町を寺まで歩く⑦

宮 柊二

吾と吾が子と野なかの寺に銀杏の葉あみつゝひろふその銀杏の葉

古泉 千樫

後絶えよと祖師がのこしいましめをかそかに守りて寺はさびれ

中沢 庭柯

ぬ②

姉が入りし御寺の春のしら壁や藤よふたび御髪を誘へ②(小扇)

與謝野 晶子

あまたたび戦もなかに氣遣ひしみ寺望みて泣かざらめやも③

(角川文庫)

甘茶わかすことをやめたる寺多しわが寺のみが童に供養す④

米田 雄郎

雨あとを直ちに山は日暮るなり谷かげにあるひとつ寺の庭⑤

中村 憲吉

雨霧らふ稻田の道ゆあきしのみ寺を訪へば柿紅葉散る⑤

吉野 秀雄

雨けむる深山の寺のわかれみち若く応へてかへりゆく友

清水 恒子

雨避けて入り来し寺に濡れそぐ芙蓉はわれの丈よりたかき⑦

松村 英一

雨と緑とそのほかに何見ん寺に来て心すみゆくを待つごとくをり

松井 如流

①

雨に来て宿るみ寺の夕庭に九蓋草の花しづかにゆるる①

岩上 とわ子

雨の日を嵯峨野の古き寺に来て遊ばむとするところは寂し

吉田 垂穂

(明月草)

雨はれてみ寺の庭の青苔のかすかに匂ふ座敷の中に①

吉田 正俊

雨細う梨ちる寺のうす月夜影か白衣の亡き姉も来る

茅野 蕭々

あゆみ来て風しづまれる寺のかど地にかすかにわが影うつれり

古泉 千樫

嵐山花の木かげも暮れそめてふもとの寺の鐘ぞきこゆる①

明治 天皇

あらし山ふもとの寺のかねのおとに暮るる紅葉の色ぞさびしき③

樋口 一葉

新たしき瓦ふき並べ青丹よし奈良の大寺春の風ふく①

藤 真

荒畠のむかうに海の端見えてみ寺待還の人たちどまる②(小笹生)

岡 麓

荒山に寺あるところ昏れぬれば音ぞともなく硫氣噴くなり

釈 迢空

ありがたき香住の寺の襖絵のいみじき松は見るに飽かなく②

吉井 勇

ありし日の寺の衰へくりかへしむさくるしき部屋の言訳をいふ④

松田 常憲

(秋風抄)

ありし日の寺は社務所に变りたれ大き囲爐裏がなほ残りをり②

アルノ川へだてて寺の鐘聞え尖塔にあまたそのベルうごく②

荒れくるふ海にそむきて寂然とみ寺のうらに立てる冬の木⑤

淡路島けさ晴れわたり煙立つ大き薨は寺にしあるべし①

淡雪に廻廊も土もひた濡るる昼を見にけり信濃のみ寺に

あをあとと高き木立にかこまれて薨占りたる浅草の寺①

青苔をしたたり落つる沢水の音絶ゆるなき山裾の寺

青芝に残る日ざしをかへり見て入り来し寺をまた出でてゆく⑩

蒼白き月夜の寺のなが土塀かげふみゆかば死にさそはれむ⑥

あをによし奈良の寺の塔をかすめいづこをあてと飛びゆくから

す⑥

青葉あらしざわめく森を衝きいでしみ寺の鐘の明るさを見き①

安居せし寺を下り来ていにしへの氣比の浦みの魚を食^ぢべぬ①

家にあれば候補連呼の声うるさしこの寺に蟬をきくしまされり⑥

伊賀に住みし十幾年のつひの日よ山茶花咲ける寺を去りゆく

怒りて家出でて来し昼すぎに人のはふりの寺に坐りつ(新萬葉集五

いくさにと召されて僧は在らざりき冬山の寺にしばらく憩ふ⑩⑩

兵火に罹らぬ寺はあらずとぞなげきあきらめ枯芝を踏む⑩

いくつもの鐘ゆれ鳴りてニコライの寺よりひびくわが行く坂は④

いくつもの寺は見ゆれど鐘鳴らず冬山の町日は暮れはてぬ③

幾年か前に火にやけほろびたる寺のあとに釣鐘を起しすあたり③

いくとせもこほしく思ひし甲斐の国身延の寺に伴はれけり①

藤原東川

中河幹子

尾上柴舟

山口茂吉

釈 迢空

岡野直七郎

高田浪吉

松村英一

金子薫園

柳原白蓮

森山縫子

森山汀川

花田比露思

前田義久

竹山省三

川田順

川田順

佐藤佐太郎

島木赤彦

土屋文明

久保田不二子

行く道は坂にかかりて山の冷えやうやく至る寺近からむ②

いく世までくづれし寺を守るとてますか仁王は小田の真中に

(間歩集)

いくらかは寺の費用をささへるる鶏あそびをり豆の畑に②

生け垣は低く目立たで前山のみどりさながら寺の垣内なる④

(角川文庫)

池ごしに見る山青し田の黄なり寺の書院に似たる長廊⑪

池の面の 水はうごかず 紅葉ばの 二二三つ浮きて 大寺はく

るる③

池水の濁うごかぬ寺なはいづくともなく蛙のこゑす②

池水のひかりにうごく藤わか葉寺しづかにて花すぎにけり①

池水の埃うかべて淀めれど閑かとおもふみ寺のうちは②

イサールの流れとともに歌はれし古きみ寺にけふは来にけり⑤

いささかのすなどり村に広場あり寺も共同井も其処にありける⑬

石五つ据ゑしのみなる寺の庭石ころありて相交如し(冬日ざし)

石五つ真砂に据ゑしこの庭やみ寺荒るるにいやもの深き(冬日ざし)

石多き里の秋かなやしろにも寺にも石を踏みてこそ参れ(故郷)

遣児多くもちてしあれば寺に棲めど内職の業に思ひを凝らす③

石階を登りて帰る僧のあり若葉の寺のひろのしづけさ①

石段をのぼる真下に草屋根の構閑かにゆたかなり寺③

石坂ののぼり程なく磯の寺大き蘇鉄と松といきほふ③

礎山のこのいただきの平^なされて礎あるは寺かも立ちけむ⑩

岡崎義恵

尾上柴舟

藤原東川

吉野秀雄

與謝野寛

下村海南

高田浪吉

芥川徳郎

高田浪吉

斎藤茂吉

斎藤茂吉

窪田空穂

窪田空穂

小杉放庵

中沢庭柯

藤原東川

千代国一

松本滋代

窪田空穂

窪田空穂

窪田空穂

石だたみおくふかぶかと 法堂のあるばかりなる寺のむなしさ⑤
石だたみおくふかぶかと法堂のあるばかりなる寺のむなしさ⑥
石階を登りて帰る僧のあり若葉の寺のひるのしづけさ①

土岐善磨
土岐善磨
藤原東川

磯がある松原がある寺がある ああこの愁ひどうしていいか

鳴海要吉

いそがはしき日の暮に来て工場地の古きお寺に墓をさがせり①

早川幾忠

磯崎の寺の小庭に葉鶏頭のに茎紅し見えにけるかな

川田順

いそしみてみ寺直しの土運ぶ童らよりはたや国興らむか③

吉野秀雄

(角川文庫)

いそのかみ年ふる寺のかたはらに杜のあるじとわれなりにけり③

湯本禿山

磯山にいらかを見せし大寺の階のぼりゆく君が菩提寺⑦

四賀光子

磯山のこのいただきの平^{なら}されて磯あるは寺かも立ちけむ⑩

窪田空穂

磯山の寺にきこえて鳴る潮のしるきは昼の関くるにやあらむ④

中村憲吉

いたい足さすつてみても、なでてみても、私の寺のうぐひす④

米田雄郎

抱だき来て光れる鶏^{かひ}を人見せぬ南部の秋の大寺の庭⑪

與謝野寛

板ぶすま竜師あがきて雲を呼ぶこの大寺の方丈の昼①

中村正爾

いたましき女身変化の物語つづめる寺よ江のほとりなる③

松本滋代

一寺をのこさぬ十津川をきて大塔村阪本にきく寺の鐘③

松本滋代

一途なりしわが性格をおもひつつ寺の小僧にてありし日を恋ふ⑤

米田雄郎

市なかの寺としもなく院々の昼寂とした松に影あり③

岡本大無

一日にいくたびとなく飼鳥のかけすが啼きて山の寺暮るる⑭

松村英一

市人ら通りぬけ行く大寺の山内すずし夏木立して③

岡本大無

一めんに霜にくろずめる桑畑わがゆく寺は山の上に見ゆ

作田良雄

(新万葉集四)

一面に藻草浮べる池を見つ人なき寺の裏にまはりて⑤
市中の寺としあれど日永さを真昼しづけし鐘も黙して③

村野次郎
岡本大無

一村に十一も無駄な寺がある坊主は昼寝し暮を打ってゐる②

斎藤喜博

一步一步白き砂地を踏みて行くわが足音もしづかなる寺

山田葩夕

一本の荒草もなく掃かれたる庭に陽の射すこの寺の秋(過)

武田文磨

いつ来ても空気がかるき村と思ふ寺をかこみて低き聚落①

生咲義郎

いづくにかあふれてたぎつ水の音境^{けい}ひろびろと秋の日の寺⑦

太田水穂

(現代短歌全集・現代短歌大系)

いづこなる寺にかあらむ重々と昼を鐘打つ雪の町かな①

山口不二花

何処なるみ寺の鐘かとよみゐて奈良に目覚むれば雪降りてをり②

立花馨

いづこにも寺はあるらし空明けてこの中野にも朝の鐘鳴る⑨

岡野直七郎

一山にひびらく風はこの寺の高き甍を凍らしめ過ぐ②

辻本敬三

いつの世に盛えし寺と伝へねばいしずあ狭く草に埋まる①

生咲義郎

五山の僧詩箋ここにひらきしとふすたれて小さき山裾の寺

森伊佐夫

(第一集)

一むかし昔の寺に来てみれば木立しげりて和向相かはらず①

清水比庵

稲田の中の駅に降りたてば君が寺の甍の反りに日の照れる見ゆ⑦

松田常憲

いなめのに現はるる日の天渡りい隠ろひ行くを山の寺に見る⑨

窪田空穂

いなむしろ河内のうたびと朴人がやまひやしなひし寺と見てすぎ

三井甲之

つ①

古のみ寺の跡はさびれつつ青草生ひて礎石を掩へり①

小泉茅三

いにしへの由来あるみ寺しのびつつ若葉の色に染みて息ひぬ②

岡麓

いにしへにみまかりし人のきのふけふみまかりしごとみ寺しづけし② 高田 浪吉

いにしへの大き御寺は跡もなし冬空さぶく塔ただにあり(新萬葉集) 藤本 蔦子

いにしへの基衡が寺にのこる池刈りたる麻を村人漬す④ 窪田 章一郎

いにしへの義淵が寺に夜を来たりあたたかき風呂ふるまはれけり 染谷 進

⑤(新萬葉集四 現代短歌大系) 蕨 真

いにしへの事はしらじか白もくげ寺の垣外に花さかりなり① 上杉 一甫

古の寺の跡処と思へかもここの桑畑風の渡れる① 與謝野 晶子

いにしへの奈良の御寺の内陣を歩む心地に臘梅を嗅ぐ⑩(夏より秋へ) 川上 小夜子

いにしへのみ寺に通ふ紫雲英みちとゆきかくゆき年は古りけむ (新萬葉集二) 豊島 逃水

いにしへのみ寺のあとの礎に照れる光はゆめならなく① 岡 麓

いにしへのみ寺の跡をとめ来れば桜の花は道に木の間に③(朝雲) 今井 邦子

いにしへゆ名高き寺の片かげの啼き窓べに絵葉書買へり④ 中沢 庭柯

生命ありて再び来しこの寺の庭松陰にはのめく懸巢③ 森山 汀川

岩が根の紅葉がなかに寺ありて打ちならす鐘響きわたれり① 川田 順

岩山の岩むらの間にひとところ樹のしげり見えて寺はこもらふ⑤ 北原 白秋

飯櫃にたたての飯の湯気たてり大寺はよしこのあかときを 斎藤 茂吉

伊吹嶺に雪ふるころはみちのくのみ寺しぬびたまふといふも尊し 森 伊佐夫

⑦ 今川徳川古きゆかりを遺す寺今年の蟬の庭に啼きつぐ(節 第二集) 米田 雄郎

いまの世の寺のくらしをおもひつつ時すこしけり中風をやみて⑤

今の世の寺の経済おもひつつ世すこしせしもひとよを経るにと⑤ 米田 雄郎

今もかも円い月の出この寺の杉の木立の黒きが上に① 竹添 履信

いまもなほ親しと思ふは仙崖の博多の寺の破れ畳かも②④ 吉井 勇

いみじかる寺をおかんと思ふ山あまた立つかな湖上に見れば②⑥ 與謝野 晶子

(心の遠景) 妹も吾もすこやかに生きてこの秋を山のみ寺に逢へりけるかも① 金子 信三郎

芋畑の露けき径はるばると鶉の櫛む寺を一人見に来し(新萬葉集六) 中西 月華

入相の鐘鳴りいでぬこの寺のいづこにか広き実相院神通密寺 (宵振) 中島 哀浪

いりあひの鐘のひびきは今しがた過ぎ来し寺に撞くにやあらむ① 平福 百穂

入相の鐘きこゆなり雉の宮神社の岡の下寺ならむ(朝雲) 岡 麓

入江のみづたひらかに夕日さしなぐさ山のへ寺の壁白し① 三井 甲之

岩くぐる水にかあらむこの山の御寺しづけき潺湲のおと③ 岡本 大無

巖端のせまれる寺の狭庭にし錢苔の青眼にしたしもよ③ 中沢 庭柯

因幡路に旅ゆける友は或寺の世ばなれし庭を絵にうつしけり③ 植松 寿樹

上の寺に遊びぬし人ら岩の面を踏み飛び歩み下りて来る見ゆ⑥ 川田 順

雨乞の寺の鐘鳴りひびくなり白昼の如く月てりわたる①(庭苔) 岡 麓

歌会に來ては親しむ寺ながら什宝鯨波の屏風はまだ見ず(道芝帖) 藤原 染子

歌によき夏の夏の青葉道此寺凡そ幾百つづく(山上湖上) 川崎 杜外

うちつけに牡丹あかるき庭に入る千仏院といふ寺の庭(群丘) 佐藤 佐太郎

うち靡く薄の中のこまつなぎ秋秋に似て寺のうら山⑥ 島木 赤彦

うち迷ふ思ひありしが来て見れば道おのづからこの寺に出でぬ 古泉 千攄